

県とJA連携、研修で経営指導

就農促進へ支援に力

② 飛騨牛

ぎふ
深考

2025県知事選

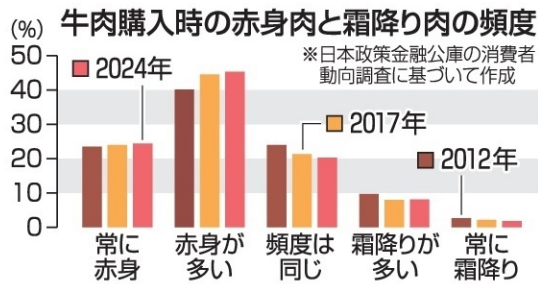
農業高校を卒業後、種雄牛の管理に携わる神田純さん。10日午前、高山市冬頭町、飛騨家畜流通センター



「何もないところから牛農家を始めようと思ったら、1億円近くかかる」。県飛騨牛銘柄推進室の桑畑孝慈室長は、自らの試算を基に、新規就農の難しさを示す。肥育のみで生計を立てようと考えた場合、子牛(1頭50万円)40頭で2千万円、牛舎に5千万円はかかる。子牛を育てて出荷するまでの2年間は収入がなく、餌代や燃料代などが着実にかさむ。

市場の枝肉相場は、生産コストの高止まりに加え、消費者の節約志向や供給過多によって低調が続く。今は新規、独立を目指すには最悪の時期」と桑畑室長は言う。

県は数年前から、新規就農のみにこだわらず、農業法人などで従業員として働く「雇用就農」の支援に力を入れる。県内に2カ所ある研修施設のうち、ひだキャトルステーション(飛騨市古川町)では運営団体の飛騨農業協同組合(JAひだ)や全国農業協同組合連合会県本部(JA全農岐阜)、飛騨市などと連携して2019年の開所当初から雇用就農を見据えた2年間のカリキュラムを実施。子牛生産から農場の経営管理までを学び、人工授精師など専門資格の費用助成も行



物価上昇による節約傾向や健康志向の高まりなどを受け、近年は霜降り肉よりも赤身肉の人

近年は赤身肉が人気

ただ、大規模な農家が少ない岐阜県では、学校や研修施設を出た後にも課題が残る。県肉用牛協会の辻直司会長(62)によれば、北海道や鹿児島県では給料をもらいながら研修でいる農場もあるという。さらに資金面の負担を減らすために牛舎の一部を借りるアパート形式の農場なども先進地で始まっている。辻会長は「そういう地域に人が流れるのは当然」と明かし、県内の担い手に「岐阜に残って働く意味、魅力を知ってもらうことも大事」と話す。

物価高で節約、「霜降り」消費減

気が高まっている。霜降り肉の部位が多い和牛の価格は2022年1月以降、下落傾向が続く。JA全農岐阜畜産販売課の担当者「岐阜県では今のところ高く推移しているが、全国的に和牛の情勢は非常に厳しい」と話

り、プライドを持って牛を育てている姿を近くで見た」のがきっかけで、今の仕事を志した。

同研究所は県内唯一、母牛に精子を提供する「種雄牛」の管理を担っている。現在は子牛を育てて市場に出荷し、種雄牛の精液採取にも携わる。神田さんは「飛騨牛の基礎となる部分に関わることができて、やりがいがある」と話す。

県内統一の銘柄となって今年で32年となる飛騨牛は、国内外で高級ブランド牛としての地位を確立した。輸出量は08年度から22年度までの13年間で約300倍の89・5トまで伸びたほか、新型コロナウイルス禍後のインバウンド(訪日客)需要にも支えられ、慢性的な供給不足が続いている。辻会長は「流通はこれ以上ないくらい伸びている」と喜ぶ。一方で、担い手不足には「せつかく基幹産業に育った飛騨牛。守り続けるには、作り続けなければならない」と危機感をにじませる。(安井真由子)